

同性愛に対する寛容性の形成：高校生の性に関する情報源の役割

Development of tolerance towards homosexuality: The role of information sources about sexual behavior of high school students

石 原 英 樹

Hideki ISHIHARA

Abstract

To ascertain a mechanism for forming tolerance towards a social minority, we focus on homosexuality as one representative of a sexual minority and examine what kinds of information sources on sexuality are associated with attitudes of tolerance towards homosexuality.

According to the results from the OLS regression models using micro data from a national survey on Japanese high school students, getting information on “romantic relationships” through the Internet is positively associated with tolerance towards sexual behavior with a same-sex partner for both sexes. For women, sex education on physical aspects such as pregnancy and masturbation as well as sex education on gender equality show a positive relationship with tolerance.

On the other hand, those who learn about sexual intercourse through sex education tend to show negative feelings towards homosexuality. Women who get information on “romantic relationships” through comics have a higher level of tolerance than those who depend on other media. The relationship between sex education and tolerance towards homosexuality is not clear for men, but those who learn about “romantic relationships” from senior students show negative attitudes towards homosexuality. Sexual information from the Internet or comics and gender equality in sex education may influence the development of tolerance. Our study also suggested that, for men, homo-social communication that enhances negative feelings towards homosexuality emerges in the teenage years.

Keywords : sexual minority, tolerance, gender

I. 問題意識

社会から排除されるマイノリティーへの顧慮は、「社会的包摂」「ダイバーシティ」といった概念と絡んで近年、社会福祉、教育学、労働社会学等において主要な関心領域の一つになっている^{4) 12)}。これらの概念の要諦は、〈多様性を容認する社会意識の醸成が、社会全体の存続にとって重要である〉ということである⁶⁾。このような社会づくりを進める上で、特定のマイノリティーに対する寛容性がどのように形成されるのかを理解することは極めて重要である。

本研究では、社会的マイノリティーとしての同性愛者に対する寛容性の形成に着目する。具体的には、同性愛に対するイメージの形成期として特に重要と考えられる青少年期において、人が性に関してどのような

経路でどのような内容の情報に接しているかを明らかにしたうえで、同性愛に対する寛容度との関連を検証し、日本における同性愛に対する寛容性形成の特徴とメカニズム解明の一助としたい。

寛容性でしばしば議論となる「寛容社会」とは、多くの国で1960年代から70年代に起こった、(主に性的な)逸脱に対する(態度および行動の)自由が大きくなるような社会変化を指す。こうした変化は、より一般的には社会的な寛容性(多元文化的な寛容性)に含まれる。社会的な寛容性(同性愛へのそれも含む)をここでは「自分とは考え方や価値観が異質な他者に対する許容度」と定義する。

社会的な寛容性が、教育的に望ましくない、例えば中高生の安全ではない性行動や犯罪(万引き、喫煙、薬物乱用)やそれらへの黙認を助長するかどうかは定かではない。

しかし「世界価値観調査」の結果などをみると、こ

こ20年間、日本における同性愛への寛容性が上昇しているのに対し、売春、自殺、ワイロを受け取ること、脱税、キセル乗車などの犯罪や逸脱行為に対する寛容性は上昇しておらず、同性愛に対する寛容性がすなわち逸脱行為全般への寛容性を意味するとは言えない状況も見受けられる。

中高生の教育においては、マイノリティーなどへの多元文化的な寛容性を認める教育と、市民社会の維持を危うくする（と市民社会が定義する）逸脱行為への批判意識を持たせる教育の双方が必要となるだろう。

Ⅱ. 背景と先行研究

同性愛に対する寛容性がどのような立場や属性で高いのかについては、欧米において数多くの研究が進み、日本でも同様の研究が徐々に蓄積されている。

欧米の研究によれば、男女差については、一般に女性の方が男性より同性愛に寛容であるという結果が出ている^{3) 13) 14)}。世代効果および時代効果については、「世界価値観調査」などの繰り返し横断調査によれば、同性愛への寛容性は、1980年代以降多くの国で上昇しており（世代効果）、さらに同一コホート内で時間的に変化していること（時代効果）も指摘されている³⁾。生活圏との関連で言えば、知り合いに同性愛者がいるほど²¹⁾、また都市部に住んでいる人ほど³⁾、寛容性が高いことが指摘されている。そして、社会経済的地位との関連では、同性愛に限らず、大学教育が多様性を求めるリベラルな考えを促すことが広く知られており⁹⁾、高学歴ほど寛容性が高い。職業についても、専門・管理職で寛容、ブルーカラー層では不寛容という結果が観察されている^{3) 20)}。

日本については石原¹⁰⁾が、1990年代の日本のデータ「世界価値観調査」を使い、寛容性が高い属性の特定を試みている。

欧米と共通していた、あるいは日本における先行研究を追試できた結果は以下のとおりであった。まったく容認しない人が最も多い一方で、調査ごとにその割合が少しずつ低下していることが確認できた（時代効果）。男女差については、すでに山下・源氏田が同様の結論を導いているが²²⁾、「世界価値観調査」でも、男性のほうが全く容認しないという割合が1995年以降の調査で常に高かった。高学歴者は寛容性が高く、マニュアル労働者においては不寛容性が高いということも欧米の先行研究の結果と整合的であった。

しかし、これらの共通点のほかに、異なる結果も示された。それは、日本においてのみ高学歴層だけでなく中卒層、また階層意識のやや低い層で寛容性が高い結果が示されたということである。石原によれば、高学歴者の同性愛に対する寛容性は、異質者一般に対する寛容性やジェンダー対称的な意識と強く結びついていた¹⁰⁾。しかし低学歴層における寛容性の高さは、こうした高等教育から得られる意識では説明できず、別の説明が求められるところである。

先進的な価値観では説明できない低学歴層の寛容性の高さは何に由来するのか。我々は様々な可能性の中で、性に関する情報の入手経路に焦点をあてることとした。先行研究によれば、同性愛に対する寛容性は同性愛に対するイメージと密接に関わっている。そして「日本版総合的社会調査 (Japanese General Social Surveys)」を分析した先行研究によれば、学歴が低いほどテレビ視聴時間が長い⁸⁾。すなわち、日本におけるメディア接触が同性愛に対して特定のイメージを提供し、それに対して、特定の社会的属性がより多く接触することで、より寛容的あるいは不寛容な態度を示すに至るとの説明が可能かもしれない。実際、石川は情報源の違いが、性意識の違いやその男女差に影響を与えることを指摘し¹⁰⁾、山下・源氏田は、メディア接触頻度が多いほど、同性愛に好意的であるとの結果を示している²²⁾。メディアだけでなく、思春期における学校での性教育や、親や友人といった人間関係を通じた情報入手が寛容性形成に関与している可能性もある。そこで、本研究では、日本の高校生に性に関する情報入手先と同性愛に対する寛容性の関係を検証することとする。

Ⅲ. データと方法

本研究では、「第6回青少年の性行動全国調査 (JASE05)」を用いる。この調査は2005年11月～2006年3月に実施され、中学生、高校生、大学生を対象としているが、本研究では高校生のデータ (N=2,172, うち女性1,083, 男性1,089) のみを使用する⁽¹⁾。層化三段法で調査対象者の抽出が行われている。すなわち都市規模ごとに調査地点を12地点選定する⇒次にこの地点から地域規模や学校種別、生徒数などを考慮し中学校22校、高校22校を選ぶ⇒最後に、選ばれた学校の各学年から、当該学校と相談しながら同意の得られた学級を調査対象集団として選定している。日記

式集合調査である。データ提供者は日本性教育協会（代表者 原純輔）であり、「社会・意識調査データベース SORD 作成プロジェクト」事務局を通じて二次利用を許可された。なお、「第6回青少年の性行動全国調査」は、日本性教育協会によって主要な結果がまとめられている¹⁷⁾。

この調査データを用い、本研究では二つのアプローチによって、日本における同性愛に対する寛容性形成の特徴を明らかにしたい。まず、同性愛に対する寛容性に、どのような高校生の背景、あるいは情報入手先が関係しているのかを探る。そしてもう一つが、このような情報源と同性愛に対する寛容性との関係と、同性愛以外の社会的な議論になっている性行動、たとえば、よく知らない相手とのセックスや人工妊娠中絶といった行動に対する寛容性と各情報源との関係が共通しているのか、それとも同性愛に対する態度にのみ影響のある情報源が存在するのかを検証する。

「青少年の性行動全国調査」では、「あなたは次のようなことについてどう思いますか」に続くいくつかの性的な行動について5段階の賛否を問う設問7つの中に(5)「同性と性的行為をすること」が含まれている。分析に使用する際には「かまわない」=5点、「どちらかというとかまわない」=4点、「わからない」=3点、「どちらかというとかまわない」=2点、「よくない」=1点の5段階の得点を与え、連続変数と見なし、従属変数として用いる。同様に、(1)愛情がなくてもセックス（性交）をすること、(2)お金や物をもらったりあげたりしてセックス（性交）をすること、(3)恋人のいる人が、恋人以外の人とセックス（性交）をすること、(4)知り合ってすぐの相手とセックス（性交）をすること、(6)中絶（人工妊娠中絶）をすること、(7)できちゃった結婚（妊娠をきっかけとした結婚）をすること、についても5段階の賛否が訊ねられているので、「かまわない」に最大値を与えた連続変数とみなし、従属変数として用いる。

共変量については、高校生の背景を示す調査地点の都市規模と高校種別、そして本研究の主要な関心となる性に関する情報源として、これまで受けた性教育の内容と男女交際に関する情報入手先を用いる。以下に詳細を説明する。

都市規模：大都市、中都市、町村の3種の回答を得ており、欧米の先行研究によれば、同性愛に関する情報の多い都市部ほど寛容性が高いという結果が出ている

が、日本について検証した石原では、欧米と異なり、都市部における寛容性の高さは明確には得られていない¹⁰⁾。

高校種別：普通科か職業科かのカテゴリー変数を用いる。両者で異なる教育内容や進学希望の違いが同性愛への寛容性に影響する可能性があるが、理論的説明は十分でない。むしろ本研究では職業科は普通科に比べ男子校、女子校の比率が高いため、共学に比べた別学効果の代理変数とみなし、別学における同性が周囲に多い環境の中で同性愛に対する寛容性が増しやすい可能性を検証する。

受けた性教育の内容：「あなたは今までに次のような内容を学校で教わりましたか」に続き、1. 妊娠のしくみ、2. セックス（性交）、3. 避妊の方法、4. 自慰（masturbation, オナニー）、5. 性感染症（性病）、HIV／エイズの知識、6. 人工妊娠中絶、7. 男女の心の違い、8. 恋愛、9. 男女平等の問題、10. セクハラ、性暴力や性犯罪の問題、11. 性の不安や悩みの相談のしかた、12. その他、13. 特に教わったことはない、といった各項目についての有無を複数回答で得ている。ダミー変数として投入し、関係の深い項目を探索的に明らかにする。

男女交際に関する情報入手先：「あなたは、次のことがらについて、どこから知識や情報を得ていますか。□の枠の中の選択肢から3つまで選んで番号を（ ）内に記入してください。」に続き、1. 男女交際の仕方について、2. セックス（性交）について、3. 避妊方法について訊ねられており、男女交際の仕方についての情報入手先として、1. 親やきょうだい、2. 友人、3. 恋人、4. 先輩、5. 学校の先生、6. 学校の授業や教科書、7. コミックス／雑誌、8. ポルノ雑誌（H雑誌）／アダルトビデオ、9. インターネット、10. その他、11. とくにない、の選択肢が挙げられており、複数回答で得ているので、ダミー変数として投入し、関係の深い項目を探索的に明らかにする。

分析には、「同性との性的行為」を含む各性行動に対する寛容性の得点を従属変数としたOLSモデル（最小自乗法による重回帰分析）を用いる。また先行研究から、男女の寛容性形成が大きく異なる可能性が予想されるため、男女別にモデルを推定した。

なお情報入手先と寛容性の関係は、一方的なものではなく、双方向の影響の可能性があるので留意する必要がある。すなわち情報源が寛容性に影響を与えるだけでなく、同性愛に対する寛容性が高い人ほど、あるいは同性愛そのものに関心が高い人ほど特定の情報源に関心を持つといった可能性である。本研究で使用するデータは一時点で調査した横断調査であるため、情報源アクセス時期と寛容性の変化に関する時間的な前後関係は特定できない。あくまでも両者に統計的に有意な結びつきがあるかどうかを検証することによって間接的に因果関係を推論する。

なお、「同性愛」と「同性との性的行為」は同一ではなく、本来は違いなどに考慮して分析を進める必要がある。しかし今回は調査データの二次利用という限界によって既存の調査項目を使用せざるを得ず、用語の違いによる結果への影響を検証することはできない。同性愛と同性との性的行為の違いに関する分析については、別の機会に譲ることとする。

IV. 結果

1. 記述統計

まず、従属変数である「同性と性的行為をすること」に対する態度の分布を確認する。女性は34%、男性は58%が「よくない」と回答し、男性の不寛容が高い。「わからない」との回答は女性のほうが男性より多い。「どちらかといえばかまわない」を含めると、容認する女性は25%、男性は16%と、女性の寛容性のほうが高い。なお、2005年において18歳以上の日本人男女を対象とした「世界価値観調査」によれば、「まったく間違っている」から始まる10段階の最初の4段階の合計が男性で51%、女性で36%であり、高校生の結果がさほど偏ったものではないことがわかる¹⁰⁾。

図1には、「同性との性的行為」以外の性行動に関する態度の分布も示している。寛容度を比較すると、女性の場合は同性との性的行為への寛容性は相対的に高く、「できちゃった結婚」に次ぐ高さなのに対して、男性では4番目となっており、「愛のない性交」や「よく知らない相手との性交」よりも寛容度が低い。こうした男女の違いは、男女によって「同性との性的行為」からイメージする内容が大きく異なっていることを伺わせるものであり、今後、具体的なイメージを確認する研究が必要であることを示唆する。

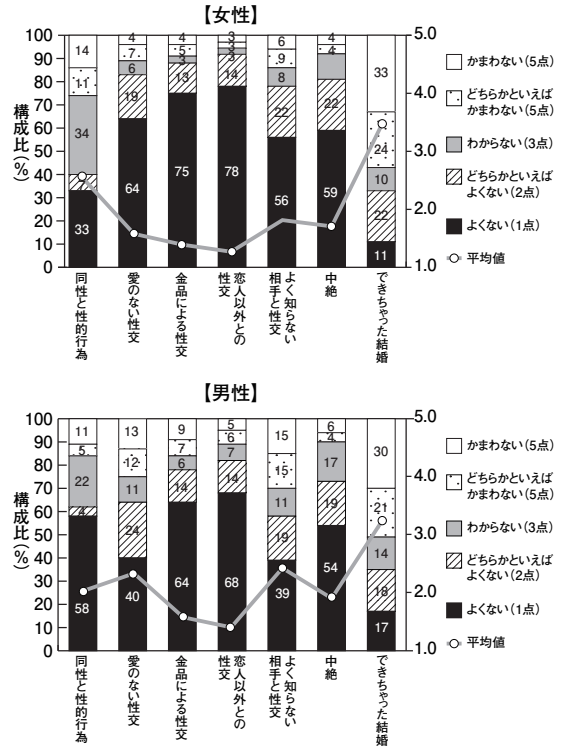


図1 各性行動に関する寛容性の分布と得点化後の平均値

表1 分析変数の記述統計（各項目の選択率）

変数		女性	男性
調査地	大都市	0.37	0.37
	中都市	0.33	0.35
	町村	0.30	0.28
高校種別	普通科	0.78	0.83
	職業科	0.22	0.17
受けた性教育内容	妊娠	0.92	0.85
	性交	0.58	0.62
	避妊	0.84	0.82
	自慰	0.21	0.47
	性感染症	0.94	0.92
	中絶	0.62	0.61
	心の違い	0.48	0.53
	恋愛	0.21	0.28
	男女平等	0.58	0.62
	セクハラ	0.37	0.48
相談の仕方	相談の仕方	0.26	0.32
	その他	0.00	0.01
	とくになし	0.02	0.03

男女交際にかんする 情報入手先	親きょうだい	0.23	0.13
	友人	0.76	0.69
	恋人	0.16	0.14
	先輩	0.21	0.35
	教師	0.04	0.04
	授業教科書	0.06	0.06
	コミックス	0.42	0.20
	AV	0.01	0.04
	インターネット	0.03	0.05
	その他	0.01	0.02
	とくになし	0.08	0.19
標本数		1,083	1,089

続いて表1には、分析に用いる説明変数の記述統計を示した。当該カテゴリーにあてはまる場合を1、あてはまらない場合を0とし、選択率が平均値として示されている。なお受けた性教育内容、男女交際に関する情報入手先は複数回答である。

女性の22%、男性の17%が職業科であり、この中には別学あるいは同性の比率が比較的高い学校が多く含まれると予想される。受けた性教育の内容では、女性は性感染症、妊娠、避妊、中絶の選択率が6割を超え、男性では性感染症、妊娠、避妊、性交、男女平等、中絶が6割を超えている。男女交際に関する情報入手先では、男女とも友人が最も多い。女性はコミックスからの情報入手率が比較的高く、男性は先輩からの情報入手率が高いといった違いがある。

2. モデルの推定結果

表2、表3には、各性行動に対する寛容度を従属変数としたOLSモデルの係数を示した。まず、表2の女性の結果から見ていく。「同性との性的行為」との間に統計的に有意な正の関係（確率10%以下、以下同様）が示された変数は、大都市の高校、職業科、受けた性教育として妊娠・自慰・男女平等、男女交際に関する情報入手先としてコミックス、インターネットであった。一方、負の関係が見られたものとしては、性交について性教育で学んだというものであった。

また、表3の男性に関する「同性との性的行為」への寛容性に関係が深い変数を見ると、男女交際に関する情報入手先がインターネットの場合に正の関係があり、先輩を挙げている場合、負の関係が示されている。ここでの先輩には同性の場合、異性の場合の両方が含まれていると思われるが、高校では男女別の部活動なども多いことを考えると、多くの場合、男女交際

等の話題を共有するのは同性の先輩、すなわちここでは男性の先輩からの情報入手の影響と想定される。

このように男女で共通するのは、男女交際の知識をインターネットから得ている場合に「同性との性的行為」に寛容的であるという点のみである。その他については、たとえば職業科の効果は、男子校では不明瞭で、女子校でのみ寛容性が高いことと関係している。都市部の効果も女性のみで見られるが、これは世界価値観調査を使った石原¹⁰⁾の研究とも整合的である。

性教育の影響は、女性には見られたが、男性には見られない。また、性交に関して性教育で学んだ場合、寛容性が低いという結果は、性教育の中で扱われる性交が異性との性行為を強調する傾向にあることを意味しているのかもしれない。性教育以外の情報源に関する男女差も興味深い。女性はコミックスから情報を得ている場合、寛容性が高いが、男性はコミックスの影響はない。一方、男性は先輩から男女関係を学んでいる場合、「同性の性的行為」に対し不寛容になりやすいことを示している。高校生では同性間の先輩後輩関係がより密である事情を考えると、男性同士のコミュニケーションの中で、同性愛を否定するような言説が多い可能性を示唆している。

以上のように、同性愛に対する寛容性には男女で異なった情報入手先が関係していた。こうした情報入手先は、他の性行動に対する寛容性とも関連するのだろうか。表2、表3には、同性との性的行為以外の性行動と関係する説明変数の推定結果も示されている。女性については、性教育における自慰の知識は、「よく知らない相手との性交」や「できちゃった結婚」に対する寛容度と関係している。また男女平等も「できちゃった結婚」と正の関係が見られ、インターネットは、「愛のない性交」、「金品による性交」、「よく知らない相手との性交」、「中絶」の各項目と正の関係がある。すなわちインターネットからの情報は、社会的に議論のある性行動を是認させる影響がある、あるいは、社会的に議論のある性行動に関心がある女子高校生がインターネットの情報により多く依存しているという状況が示唆される。他方、職業科とコミックスとの正の関係は、「同性との性的行為」に対してのみしか観察されなかった。職業科における環境、その一つとして挙げられる、同性が多いといった環境やコミックにおいて描かれている男女関係といったものが、同性との性行為を肯定的に受け止める要因となっている

表2 各性行動に対する寛容性に関するOLSモデルによる推定結果：女子高校生

説明変数	同性と性的行為	愛のない性交	金品による性交	恋人以外との性交	よく知らない相手との性交	中絶	できちゃった結婚
	β	β	β	β	β	β	β
切片	1.967 ***	1.406 ***	1.235 ***	1.479 ***	1.737 ***	2.034 ***	3.046 ***
調査地[中都市]	大都市	0.435 ***	0.064	0.033	0.079	0.129	0.039
	町村	0.141	-0.015	-0.013	-0.028	-0.009	-0.003
高校種別[普通科]	職業科	0.216 #	0.063	0.077	0.043	0.108	0.046
受けた性教育内容	妊娠	0.322 #	0.199	0.180	0.119	0.201	0.130
	性交	-0.244 *	-0.016	-0.049	0.068	-0.032	-0.097
	避妊	0.130	0.166	0.180 #	-0.028	0.093	-0.099
	自慰	0.211 #	0.084	0.036	-0.035	0.195 *	0.015
	性感染症	-0.089	0.032	0.008	-0.107	-0.290 #	-0.234
	中絶	-0.045	-0.119	-0.082	-0.083	-0.004	-0.039
	心の違い	-0.029	-0.101	-0.054	-0.050	-0.031	-0.033
	恋愛	-0.061	0.023	0.062	0.095	-0.098	0.169 #
	男女平等	0.291 **	-0.076	-0.071	0.024	-0.030	0.000
	セクハラ	-0.077	-0.017	-0.021	-0.019	-0.083	-0.045
	相談の仕方	-0.073	-0.067	-0.076	-0.061	-0.177 *	-0.150 #
	その他	-0.194	0.473	0.125	0.102	-0.342	0.456
男女交際に関する情報入手先	親きょうだい	0.099	0.062	-0.016	0.010	0.002	-0.043
	友人	0.081	-0.028	-0.044	-0.083	0.026	-0.128
	恋人	-0.034	0.194 *	0.143	0.055	0.377 ***	-0.053
	先輩	-0.173	0.198 *	0.149 #	0.026	0.312 **	0.004
	教師	-0.149	-0.174	-0.070	-0.230	-0.218	0.084
	授業教科書	0.112	0.078	-0.002	0.031	-0.036	0.068
	コミックス	0.208 *	-0.037	0.068	-0.047	0.062	0.029
	A V	0.720	0.399	0.364	0.329	0.354	0.242
	インター	0.462 *	0.380 *	0.479 **	0.018	0.531 **	0.380 *
	ネット	0.237	-0.520	0.653 #	-0.299	-0.204	-0.508
	その他						
標本数	1.087	1.087	1.087	1.087	1.087	1.087	1.087
R ²	0.056	0.029	0.028	0.020	0.051	0.033	0.036

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 # p<.10

表3 各性行動に対する寛容性に関するOLSモデルによる推定結果：男子高校生

説明変数	同性と性的行為	愛のない性交	金品による性交	恋人以外との性交	よく知らない相手との性交	中絶	できちゃった結婚
	β	β	β	β	β	β	β
切片	1.758 ***	2.783 ***	2.084 ***	2.293 ***	2.861 ***	2.248 ***	2.839 ***
調査地[中都市]	大都市	0.095	-0.152	-0.095	-0.128	-0.237 #	-0.033
	町村	0.027	-0.218 #	-0.065	-0.025	-0.281 *	-0.103
高校種別[普通科]	職業科	0.097	-0.272 *	-0.130	-0.036	-0.269	-0.058
受けた性教育内容	妊娠	-0.056	-0.028	0.094	-0.019	-0.162	0.039
	性交	-0.090	0.098	0.020	0.020	0.048	-0.131
	避妊	0.137	0.222	0.161	-0.105	0.294 #	-0.036
	自慰	-0.090	0.183 #	0.097	0.003	0.116	-0.071
	性感染症	0.282	-0.497 **	-0.407 *	-0.481 ***	-0.386 *	-0.040
	中絶	0.057	-0.106	-0.045	0.140	-0.054	-0.179 *
	心の違い	0.082	-0.009	-0.098	0.025	-0.122	-0.017
	恋愛	0.043	0.065	0.080	0.004	0.123	-0.014
	男女平等	0.143	-0.009	0.066	-0.028	0.148	0.076
	セクハラ	-0.011	-0.052	0.115	-0.002	0.016	-0.099
	相談の仕方	0.073	-0.060	-0.134	-0.029	-0.064	0.061
	その他	0.200	0.678	0.977 *	0.525	1.181 *	0.300
男女交際に関する情報入手先	親きょうだい	-0.027	0.106	-0.056	0.007	-0.065	-0.022
	友人	-0.159	-0.244 *	-0.155	-0.192 *	-0.104	-0.025
	恋人	0.075	0.051	0.030	-0.010	0.027	-0.159
	先輩	-0.230 *	0.131	-0.057	0.012	0.018	-0.021
	教師	-0.079	0.161	0.074	0.101	-0.140	0.140
	授業教科書	-0.030	-0.544 **	-0.414 *	-0.146	0.283	0.045
	コミックス	-0.043	0.093	0.059	-0.037	0.197 #	0.049
	A V	-0.236	0.125	0.230	-0.023	0.396 #	-0.355 #
	インター	0.535 **	0.179	0.257	0.264	-0.114	-0.071
	ネット	-0.544	0.261	0.219	0.581 *	0.444	-0.369
	その他						
標本数	1.078	1.078	1.078	1.078	1.078	1.078	1.078
R ²	0.038	0.037	0.032	0.036	0.036	0.029	0.025

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 # p<.10

可能性がある。

男性については、先輩およびインターネットからの情報入手と正の関係が示されたのは、「同性との性的行為」のみであり、他の行動との有意な関係は認められない。また、性教育の内容は、たとえば性感染症の知識は、「愛のない性交」、「金品による性交」、「恋人以外との性交」、「よく知らない相手との性交」に対し、不寛容になる方向性を示しているが、「同性との性的行為」については性教育の内容が何ら影響を与えていないことがわかる。

V. 結論とディスカッション

本研究では、同性愛に対する寛容性がどのようなメカニズムで形成されるのかを明らかにすることをめざし、高校生に対する調査データを用い、高校の環境、受けた性教育の内容、男女交際に関する情報入手先によって「同性との性的行為」に対する態度がどのように異なるのかを検証した。

受けた性教育の内容については、男性に対しては特別な影響を確認できなかったが、女性については「妊娠」や「自慰」といった身体的な知識のほか、「男女平等」といった男女の固定的な役割を問い直す教育内容によって、同性愛に対する容認度が増す可能性が示唆された。女性では「ジェンダー平等意識」が同性愛に対する寛容性に結びついていることが石原¹⁰⁾でも示されており、今回の結果はそれと整合的である。一方、日本における「性交についての性教育」は、異性間の性交を中心に据えるものであるため、こうした性教育を受けると同性愛に対する寛容性が低められる可能性が示唆された。性教育の内容がどのようなジェンダー観に基づいているのかが、青少年の同性愛に対する態度に大きく影響している可能性がある。実際、他の性行動に比べ、「同性との性的行為」に対する評価は男女とも「わからない」が最も多い。日常生活における情報からだけでは価値観が定まらない領域であり、学校教育の影響が大きいと予想されることから、性教育において同性愛をどう扱うかについて、より多くの議論が必要であると思われる。また、女性についてのみコミックスの役割が大きいことがわかった。思春期女性の価値観形成に影響が大きいことから、こうしたコミックス文化の内容や時代的变化の分析が価値観形成の研究領域において重要になってくると考えられる。

男性の場合のみ、「先輩とのコミュニケーションが同性愛に否定的な態度をもたらす」という結果は興味深いものである。すなわち、すでにセジュウィックによって、男性をとりまくホモソーシャルな環境（そこから導かれる同性愛嫌悪＝ホモフォビア）が同性愛にマイナスのイメージを与えることが指摘されており¹⁹⁾、こうした影響が思春期といった若年層においても存在する可能性が示されたからだ。これは女性においては先輩とのコミュニケーションが同性愛にかならずしも否定的な影響をもたらさない、むしろ、同性の多い職業科といった環境のほうが、寛容性が高いといった結果でも裏付けられる。こうしたピア関係（同世代との人間関係）と寛容性との関係は、同性に偏る職場（とくに男性）が多い日本において、そうした環境がマイノリティーへの寛容性拡大の妨げになっている可能性ともつながる問題であり、ダイバーシティマネジメントの議論においても注目すべき側面である²⁾。

男女ともにインターネットからの男女交際に関する情報入手は、同性愛に肯定的なイメージを与えている可能性が示唆された。メディアの影響の中でも、インターネット情報の影響はますます注目している必要があるであろう。

本研究は、調査データを二次分析することにより、同性愛に対する若年者の価値観形成に重要な側面を探索的に明らかにすることを目的としていた。数多くある可能性のうち、重要な要素を特定でき、また男女で違いがあることも明らかにすることができた。しかしながら、今回は調査項目として一律に扱った「同性との性的関係」が、実際にはどのような内容として回答者に受け取られているのかといった問題は、慎重に検証していく必要がある。受け手により男性同士、女性同士と異なったイメージをされている可能性、性同一性障害が含まれているかどうか、性的関係の範囲をどうとらえているのかなど、量的調査では詳細な内容がわからない。こうした点については、質的調査等による詳細な検証による確認が必要であると思われる。また、同性愛に対する「寛容性」の中身も、強い関心を持っている場合、興味本位のもの、無関心に近いもの、肯定感の中に謝った知識や偏見を含んでいる場合など、多様な反応を含んでいる可能性がある。こうした点に配慮しながら、寛容性の形成に関する質的・量的両面からの接近によって全体像に迫っていく必要があるだろう。

謝辞

「第6回青少年の性行動全国調査 (JASE05)」の個票データは、日本性教育協会より提供を受け、「社会・意識調査データベース SORD 作成プロジェクト」事務局より入手した。

計量社会学研究会の皆様には有益なコメントをいただいたことを感謝する。

本研究は平成21年度「二階堂学園在外研究員在外研究費」の助成を受けたウィスコンシン州立大学マディソン校社会学部での在外研究(2009年8月～2010年3月)の成果の一部である。

注

- (1) ちなみに2005年の高校進学率(通信制への進学を除く)は男性が96.1%、女性が96.8%(全体で96.5%)であった¹⁶⁾。すなわち、残りの中卒者および通信制への進学者は調査の対象に含まれていないことに留意する必要がある。
- (2) 女性のホモソーシャルな人間関係については、女子スポーツが注目される⁷⁾。

引用文献

- 1) Adamczyk, A. and C. Pitt (2009) Shaping attitudes about homosexuality: The Role of Religion and Cultural Context, *Social Science Research* 38: 338-351.
- 2) Agnew, C. R., V. D. Thompson, V. A. Smith et al. (1993) Proximal and Distal Predictors of Homophobia: Framing the Multivariate Roots of Outgroup Rejection, *Journal of Applied Social Psychology* 23 (24): 2013-2042.
- 3) Andersen, R. and T. Fetner (2008) Cohort Differences in Tolerance of Homosexuality: Attitudinal Change in Canada and the United States, 1981-2000, *Public Opinion Quarterly* 72 (2): 311-330.
- 4) Atkinson, E. (2010) Education for Diversity in a Multisexual Society: Negotiating the Contradictions of Contemporary Discourse, *Sex Education: Sexuality Society and Learning* 2 (2): 119-132.
- 5) Black, D. A., S. G. Sanders and L. G. Taylor (2007) The Economics of Lesbian and Gay Families, *The Journal of Economic Perspectives*, 21 (2): 53-70.
- 6) フロリダ, リチャード: 井口典夫訳 (2008) クリエイティブ資本論: 新たな経済階級の台頭, ダイアモンド社。〈Florida R. (2002) The Rise of the Creative Class: and How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life, Basic Books, New York.〉
- 7) Hardin, M. and E. Whiteside (2010) The Rene Portland

- Case: New Homophobia and Heterosexism in Women's Sports Coverage, Hundley, H. L. and A. C. Billings (eds.), *Examining Identity in Sports Media*, Sage, California: 17-36.
- 8) 橋本撰 (2008) 現代日本におけるメディア環境の階層特性: JGSS-2005によるテレビ・新聞・インターネット接触を用いた実証分析, Discussion Paper No.08-06, 東京工業大学。
 - 9) イングルハート, ロナルド: 三宅一郎ほか訳 (1978) 静かなる革命: 政治意識と行動様式の変化, 東洋経済新報社, 東京。〈Inglehart, R. (1977) The Silent Revolution: Changing Values and Political Styles among Western Publics, Princeton University Press, New Jersey.〉
 - 10) 石原英樹 (2012) 日本における同性愛に対する寛容性の拡大: 「世界価値観調査」から探るメカニズム, 関関社会学 22: 23-41
 - 11) 石川由香里 (2007) 情報源の違いがもたらす性意識のジェンダー差: 〈純粋な恋愛〉志向をめぐって, 日本性教育協会 (編) 「若者の性」白書: 第6回青少年の性行動全国調査報告, 小学館: 81-100.
 - 12) 岩田正美 (2008) 社会的排除: 参加の欠如・不確かな帰属, 有斐閣。
 - 13) Kite, M. E. (1984) Sex Differences in Attitudes Toward Homosexuals: A Meta-Analytic Review, *Journal of Homosexuality* 10 (1-2): 69-81.
 - 14) LaMar, L. and M. E. Kite (1998) Sex Differences in Attitudes Toward Gay Men and Lesbians: A Multidimensional Perspective, *The Journal of Sex Research* 35 (2): 189-196.
 - 15) 宮澤仁, 福富守 (2008) 同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関係, 東京学芸大学紀要・総合教育学系 59: 211-221.
 - 16) 文部科学省 (2012) 文部科学統計要覧 (平成24年度版), 日経印刷株式会社。
 - 17) 日本性教育協会 (編) (2007) 「若者の性」白書: 第6回青少年の性行動全国調査報告, 小学館。
 - 18) Persell, C. H., A. Green and L. Gurevich (2010) Civil Society, Economic Distress, and Social Tolerance, *Sociological Forum*, 16 (2): 203-230.
 - 19) セジウィック, イブ: 上原早苗ほか訳 (2001) 男同士の絆: イギリス文学とホモソーシャルな欲望, 名古屋大学出版。〈Sedgwick, E. K. (1985) Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire, Columbia University Press, New York.〉
 - 20) Svallfors, S. (ed.) (2005) Analyzing Inequality: Life Chances and Social Mobility in Comparative Perspective, Stanford University Press, California.
 - 21) Wills, G. and Crawford, R. (2000) Attitudes toward homosexuality in Shreveport-Bossier City, Louisiana,

- Journal of Homosexuality 38 (3) : 97-116.
- 22) 山下玲子, 源氏田憲一 (1996) 同性愛者に対する態度についての一研究：男女差, メディア接触量を中心として, 一橋研究 21 (2) : 163-177.

(平成24年9月12日受付)
(平成24年11月28日受理)

